

超人たち

渡辺公暁

雨の夜は手製の宇宙服を着て墓地へ出かけることにしている。

墓石の並んでいるあいだをわざとゆっくりと歩き、開けたようになって
いる場所で立ち止まってから、私はできるだけ背すじを伸ばし、目を閉じ
て顔をあげ、深呼吸しながら自分の鼓動のタイミングを計る。私の血液が、
宇宙服の表面をおおっていく水滴に対抗して熱を出しはじめた瞬間、私は
右のこぶしをぐいと空に突き上げ、そしてじっと待つ。

しばらくたっても、私の体に変化はない。雨が線香受けを叩く音は変わ
らず聞こえている。私の皮膚は少し不健康な黄土色のままだし、私の心臓
は胸の内側に収まっているし、私の身長は一・六メートルで、私の体重は
約〇・〇五トンしかない。

私は巨大な超人にはやはりなれないままこぶしを下ろす。

私の体にはピンセットが埋まっているという幻想に、ずっと前からとり
つかれていて、だから自分のおなかをなでてみるのがよくある。

いかにもうさんくさい顔の医者が私の顔をじつとのぞきこんで「はい」
と手品でもするみたいにピンセットをかざし、それを私のおなかに押しこ
んでしまうという記憶は、もちろん間違いなく夢なのだが、あまり繰り返
しこの夢を見るので、こう思いこんでしかるべき事件が過去にあったので
はないかと疑ってしまう。それは幼いころ電池を飲みこんでしまったせい
かもしれないし、ほんとうに手術を受けたことによるのかもしれない。ひ

よつとしたら、フォークを口に入れるのがたまらなくいやだったということかもしれない。しかし、いまのところ私に発電力はないし、おなかに手術の痕もないし、スパゲティだつてみんなと同じように食べられる。親にきいても知らないと言われたので、私は自分にトラウマがあるのかどうか分からないままだ。だから原因ははつきりしないのだけれど、またボンセットの夢を見た。医者の手袋がおなかに触れた感触が、いつになく不快でたまらなくて、私は目を覚ました。外では昼からの雨がやまないでいる。雨音をきくと、幼いころのことをまた考えてしまう。

幼稚園のころだつたと思うが、小さな映画館で、音も映像も荒れてしまった古いモノクロ映画を見た。どんな映画だつたかは、もうすっかり覚えていないけれど、ほとんど真っ暗な画面の中で、足音だけがゆつくりと周期的なリズムで響くシーンだけは、いまでも忘れることができない。実際には、人間が通りを歩いているありふれた情景だつたのかもしれないが、私はその足音にすくみあがっていた。大きな太鼓の感じよりも少し長く残る響きが、私の耳元へ近づいてくる。フィルムの古さからくる小さなノイズをかきわけて、何か途方もないものが、私のところへやってくる。それとも巨大な影は、私を軽々とまたぎこして、あるいは踏みつぶして、別のところを目指すのだろうか。また映画館の座席につま先まですっぽり納まるぐらいに小さかつたそのころの私は、ほとんど窒息しそうなほど呼吸を潜めながら、あるはずのない地面の揺れを、腰のまんなか感じていた。

雨の夜になると、いつもこの映画を思い出す。紙がゆるやかに焦げる音に似たあのノイズは、夜更けに降る雨の音にそっくりだつたからだ。

いまみたいに眠れない雨の夜には、私は布団の上に体を起こして、窓か

ら入ってくる水のざわめきにひたっている。ときどき、地鳴りのような足音が、たしかにいま聞こえたと思える瞬間がある。ゆらめきが耳の底に残っているうちに、私は宇宙服に着替えて外へ出かける。

私の手製の宇宙服の主材料はビニールのふくろだ。ワードローブの包装材料や、古着屋でもらったふあつい手提げぶくろや、半透明のポリぶくろや、それからもちろんコンビニの買い物ぶくろやなんかを、梱包テープで念入りにつなぎ合わせて作りあげた、完全防水のかぶりものである。腹側に開けた合わせ目に、足からそろそろと体を入れて、苦勞して取りつけたファスナーを下げ、最後の隙間をふさげば、海に入っても体はぬれない。実を言うと海で試したことはないが、自宅の浴槽でのテストでは、この全身宇宙服はたいへん有効だった。

フリースの寝巻きを着たままで、私は宇宙服に身を包む。顔の前に来る薄いビニールが吐く息でくもるのは、改善したい課題だけれど、いまのところは先延ばしにしている。もしこの内側の水分をなんとかする方法が見つければ、この宇宙服は新しい水着として売り出せるかもしれない。

「ちゃんと呼吸とかできるんですか？」私が宇宙服の気密性を自慢したとき、春田さんは大きな瞳を上下に動かしながらそう言った。確かに息苦しいし、一時間ぐらい経つと空気が薄くなって、軽くトリップすることだっているが、かといって隙間をつくってしまうと、雨水が入りこんで首すじや足首を不意打ちする。私はそういう不意打ちがきらいだから、この気密宇宙服を作ったのだ。

準備が整うと、私は宇宙服の上から長靴をはいて、玄関を開ける。時間はいつもだいたい深夜の三時すぎで、だからまずい相手に出くわすことは

ない。私はなるべく暗い道、雨の夜にはだれも通らないような道を選んで、春田さんのいる墓地へ行く。一歩動くたびに全身のビニールがこすれあつて、機械の鳥がはばたくような音が出る。髪の毛が遊び場を失つて、顔をうつとうしく刺激する。

「傘つてさ、めちやくちやいいかげんな雨具だよな」と、先に言ったのは春田さんだったか、それとも私だったか。初めに話したときから、その意見はふたりでそろつていた。雨つぶを防げるのはとても狭い範囲で、その外に出てしまった荷物や服の裾はずぶぬれだし、横風が吹けば煽られて危険なときだつてある。風がなくても、足元に跳ねてくる水滴は、まったく素通しだ。だが、私が春田さんに、あるいは春田さんが私に（たぶん）親近感を抱いたいちばんの理由は、傘が本来の役割を果たせていないということではない。意見がびつたり一致したのは、傘をさすと景色が見られないという点だった。

雨の夜の平らな空を、立ち止まつてじっくり見上げると、空気が肺に意志を持って入ってくるような感じが味わえる。月も星も飛行機も見つからず、雲の凹凸さえ分からない空から、水滴がじよじよに大きくなって顔にぶつかってくるまでを、しっかりとながめる。宇宙服を着ている私は、走つて雨宿りの場所へ駆けこむ必要もないし、傘に頭上をふさがれることもない。歩きながらビニール越しに見る黒い夜空は、奇妙な話だけれど、晴れているときよりずっと大きく見える。私は雨つぶを全身に受け止めながら、一滴も水にぬれることなく、道路のまんなかを歩いていく。この時間だし、狭い道だから車なんか通らないのだ。

私の住むマンションの近くの、少し標高が高くなつたところに、ほとん

ど手つかずの林がある。手つかずというのは建設業者にとってという意味で、実際にはそこは何十年も前から、林の中心にある寺のおかげで、じゅうぶんに手入れされている。その寺にくつついている墓地で、十一月の雨の晩、私は宇宙服を着て立っているところを、春田さんに見つけたのだ。

雨にぬれずに外を歩くには、宇宙服を着ることも、幽霊になることもともに最高の選択だろう。つまり、雨のなかでもぬれない体になればいいわけだ。私は自分の作った雨具を宇宙服と呼ぶが、春田さんはそれを着た私を、はじめ幽霊だと思っただろう。白っぽい格好で夜中に墓石のあいだを歩いていたから、たしかにそう見えただろうが、私にしてみれば、ずぶぬれで卒塔婆のかたわらにかがんでいる春田さんのほうこそ、幽霊のたぐいにしか見えなかった。

墓地の敷石は、常夜灯に照らされてつややかな色を出していたので、私は足を滑らせないように慎重に歩いた。この宇宙服は転んだりどこかに引っかけたりすると簡単に破けてしまつて、惨めな思いをすることになる。

この墓地でいちばんこけに覆われていて、ほかの墓石よりずっと大きな石碑の前に、春田さんはいつもかがんでいる。今日も傘は持つてきていないらしく、ひだの多い灰色のワンピースが体に張りついている。雨の景色を眺めるには？ 宇宙服を着るか、幽霊になるか、それともはじめからぬれることなんか気にしなければいい。

誠司さんという男友達には、会うたびに春田さんの話をしてやるのだが、誠司さんはどうもそれを私の冗談か妄想だと思っっているふしがある。

「だいたいさ、そんな格好のやつに話しかけたりしないって」

誠司さんは以前私の家に来たとき、玄関の棚にたたんでしまつてある宇宙服を見ている。

「だからそれは、何回も言つてますけど」

春田さんと初めて会つたときの話を繰り返そうとする私を、ごくいい加減なうなずきでさえぎつて、誠司さんはアミレスの薄いメロンソーダを吸う。誠司さんの髪はいつもへんな形をしていて、ふたつの山型の盛り上がり揺れるたびに、私は落ち着かなくなる。それに気を取られたこともあつてくどくどと説明をする意欲が失せてしまい、私は誠司さんの手の動きを見つめるしかなくなる。

誠司さんは学習塾で小学生を相手に理科を教えている。よく簡単な模型を見せたり工作をさせたりすることがあるそうで、食事が一段落するとかばんから厚紙とはさみとのりとセロハンテープと下敷きを取り出して、その予習をはじめ。はさみをにぎつて厚紙を加工していく誠司さんの手はとてもなめらかで、私は指と刃先がほとんど一体となつて連動するさまにいつも見とれてしまうのだ。

今日はいつもの材料のほかに、ひらひらした青い紙とふたつのビー玉がテーブルに並んでいる。

「それはなんになるんですか？」

「簡単なおもちや」

誠司さんはストローをくわえたまま言う。指先は見る間に青い紙を細長い形に切り出し、のりでわっかにくつつけ、つまんでそらまめのような形の筒にしてしまう。それから筒の底に楕円の紙をセロハンテープでくつつけ、

ビー玉を両方とも入れて、さらにまた樽田をくつつけてしまふ。こういう作業のあいだ、誠司さんはいつもはさみを手から離さない。

紙筒を振って、なかに閉じこめたビー玉がかちかちいうのを私に聞かせてから、誠司さんは下敷きを斜めに立てた。

「あ、見たことあるかも」

私の予想どおり、誠司さんはビー玉入りの筒を下敷きの坂の上に置いて手を離した。筒は不規則な動きで転がりおりにいく。

「なかのビー玉がひとつだと、しっかり転がらないときもあるんだけど、ふたつ入れておくとどうまく転がるしさ、筒の動きも複雑になるんだ」ふたり入ると複雑になるわけよ、と誠司さんはやはりストローをくわえたまま笑った。こういうくだらないことを気の利いたせりふのつもりで口に出す誠司さんが、私は嫌いではない。

春田さんが墓地に来るようになってからも、超人になるための儀式は続けていた。ただ、春田さんが大きな瞳で、いつものようにまばたきをしないで私を見ているかぎり、目をつむっても深呼吸をしても自分の鼓動のタイミグなんかつかめないだろう。だから私は春田さんが去るのを見送って、それから心臓が落ち着くまで、まだしばらく墓地でのんびり待つことにしている。

墓地に行くのは深夜の三時すぎで、最近はずっと春田さんが先に来ている。私を待っているのかどうか聞いてみたことはないし、何時ごろから墓地にいるのか、晴れの日や昼間もいるのかもわからない。私たちはそういう個人的なことではなくて、もっと抽象的なことをしゃべる。傘について。だ

れも知らない鉱石について。セミの脱皮について。反重力について。バルカン半島の床屋について。忍者について。移民問題について。ピエロのはいている、つま先の反りがあがった靴について。ザリガニについて。紙飛行機について。

春田さんが雨具を持ってきたことは一度もないし、私も雨具を貸したことはない。ぬれるのが好きだということらしく、屋根のあるところへ行こうとはしないで、私とならんで敷石に座っている。それで具合を悪くしたようすもないのだから、私なんかよりよっぽど健康的だ。体型はあまり変わらないか、むしろ春田さんのほうが細いくらいなのに、私は宇宙服に包まれていても少し震えてしまうことがある。ひよつとしたら春田さんは、かえって乾燥しているほうがいこちが悪いのかもしれない。

一時間か二時間ぐらいしゃべって、そろそろ宇宙服のなかの呼吸が息苦しくなってきたころ、春田さんは唐突に墓地を出ていく。私がしゃべっているとちゆうだつたり、春田さんがしゃべっているとちゆうだつたりしても、まったくかまわずに去ってしまう。春田さんも私も時計を持ってきていないし、雨ふりでは太陽の位置もわからないから、時間が来たから帰るというわけでもない。たとえばいちばん好きな星はなにか、という話をしているときも、

「きれいじゃなくてにがて、か。おもしろい。まるで火星に行ったことあるみたいだね」

「にがてなんです。やっぱり地球は暖かくて、それじゃ」
暖を求めることもあるんだな、と意外に思う間もなく、すばつと会話を打ち切って、春田さんはまだやむ気配のない雨のなかを去ってしまう。

それから、私は自分が落ち着くのを、息苦しさにくらくらしながら待つ。雨雲の凹凸が見えるようになってきたころ、私は立ち上がって背すじを伸ばして、こぶしを空に突き上げる。

しかし私は私のままで変わらない。その場で宇宙服を脱いで、私はとぼとぼとマンションへ戻る。

春田さんに見つかってから十六度めの雨は、宇宙服も傘もいらぬぐらい弱かった。こげだらけの石碑の前に春田さんはいなかった。こんな雨では足りないのかもしれないと思いながら、私は春田さんがいつもかがんでいる位置にかがんで、それから地面にあおむけに寝転がった。私はもう、夜でも雲の色でこれからの雨量をだいたい当てられるぐらいになっていたが、これから春田さんが来る見こみはほとんどなさそうだった。水滴の重みで宇宙服が顔にはりつく。私は薄く目を閉じて、いろいろと個人的なことを考えた。会社の同僚のことや明日着る服のことや冷蔵庫の中身のことを墓地で考えたのは、今回が初めてだった。

墓に入っている死人たちは、もちろん火葬されて粉になってしまっているのだけれど、墓地の地面の下に埋まっている白骨のイメージは、こうして頭を地面につけていると、どうしても抑えられない。宇宙服越しに自分の腹に触れて、内臓のあいだに納まっているはずのピンセットを探してみる。けれど見つかる硬いものは骨ばかりだ。

一週間の予定と献立と着まわしをぜんぶ決めてしまっても、春田さんは現れない。動悸がいつになく激しくなっていて、私はしかたなく宇宙服を脱いで、春田さんのようにしやがんで雨に身を任せ、何度も深呼吸をした。

霧雨ではあるけれど、全身があつというまにしめりけに包まれていく。吸いこむ空気は、自分の体温でぬるくなった宇宙服のなかの空気とは違つて、のどをやさしく通つていく。

どこかの墓に供えられていた茶わんが、からりと倒れた。墓石のあいだで、私を見て息をのんでいるのは、春田さんではなかった。

「あつ、すみません」

なにをしたというわけでもないのに、反射的に私は彼女に謝つた。彼女もなにも言わなかったが、頭をわずかに下げた。

髪は乱れていて、洋服も靴もどろどろに汚れてしまっている。ただ、まぶたははれていないから、頬がぬれているのは雨のせいだろう。彼女は私から目をそらし、また私のほうを見て、それから屋根のある小屋へ駆けていった。

小屋は、墓石を洗うときに使う手桶やひしやくが置いてあつて、戸がついているわけではないから、私からもなかのようすが見える。彼女は小屋へ入つて、手桶を倒してその上に座つた。

私は石碑の足もとから離れることができなくなつて、小屋のほうをながめていた。首すじから背中へ雨つぶが伝う。

彼女はうつむいて動かなくなつた。眠つてしまつたのだらうと思つて、私はようやく体のこわばりをほじいた。今夜はもう春田さんは来ないだらうし、今日はどんなに姿勢を整えてこぶしを突きあげても、超人にはなれさそうだったから、私はかたわらに畳んでおいたビニールの宇宙服を抱えて立ちあがつた。

「ハーツ」

背後から低い声がした。春田さんの声とは比べものにならないくらい低くてぼそぼそしていて太い。振り向くと彼女は小屋の床にカードを並べていた。

「ハーツ」

彼女はもう一度、カードを並べながら私を見て言った。声色も茶色がかつた髪も地味な色の薄手の上着も気持ち悪かったが、私は小屋へ入って、雨水を吸ったトランプを手にとった。

彼女はハーツのルールをあまり理解していないようだった。だいいち、ハーツは四人でやるゲームで、二人ではお互いの手のうちがすべてわかってしまうからおもしろみがない。彼女はぼいぼいと、ほとんど考えずにトランプを出していく。私はぐつに勝つつもりはなかったから、負けられるようにトランプを並べた。だから最後までやるまでもなく勝敗は決まってしまったが、彼女はそれにも気づいていないらしく、だまっただまま手元のトランプをどんどん出した。

私がおしまいまで手元に残った一枚を出してゲームを終わりにしようとする、彼女は散らばったトランプをさつと片づけてしまった。

「それクラブのエースでしょ」

そのとおりだった。

「え、わかってたんだ」

「なまえは」

「私の？ 北都」

私は本名を教えた。

「じゃあねほくとさん」

彼女は私のわきをするりと抜けて、小屋を出ていった。どたどたした歩きかたで、私はまた春田さんと比べてしまった。

彼女はいったん立ちどまって、握っていたトランプを放り捨てた。雨水でお互いにへばりつきあっていたトランプは、ひとかたまりになって地面に落ちて崩れた。

「ユウコ」

そうつぶやいて彼女は今度こそ見えなくなった。ユウコというのはどうも本名らしくないところがあったし、ひよつとしたら近くの墓碑から適当に文字を拾ったのかもしれないが、私は彼女をユウコだと思ふことにした。

ユウコの落としたトランプを集めて数字の順に並べてみると、ハートのエースがなかった。私はクラブのエースだけを持って帰った。

ユウコの話をする、誠司さんの目つきが変わった。

「あのさ、まだあのビニールかぶって出かけてるわけ？」

「そうです」

「酸素が足りなくて幻覚かなんか見えてるんだよ。もうそういうのやめな。気絶して転んだら墓石に頭ぶつける」

いつ春田さんの話をして、誠司さんはくらくらしていたのに、今回はやけにまじめな口ぶりだった。はつきり言おうと前々から思っていたのかもしれない。はさみと厚紙の工作も中断している。

「ごめんさい」

「べつに謝ることないけど、危ないからさ。やめな。ほんとに」

誠司さんはささやくように言つて私の目を見つめる。しかし私はいつものように誠司さんの髪型が気になってしまつて、うわのそらで何度も謝罪を繰り返した。

「もうお墓には行きません」

そう言うと誠司さんはやつと安心したらしく、背もたれに体を預けてファミレスのコーラを吸った。

「いまは幻覚のほうが北都に従属してるわけだけどさ、ぎりぎりだね。麻薬とかといつしよで、これからどうなるか怖いから。昼間に幻覚に振り回されたらやばいよ」

誠司さんは私を苗字で呼ぶ。

春田さんになにか言わないといけないと思つていたが、それから三週間のあいだ、雨は昼間にしか降らなかつた。天気予報によればこの季節には珍しいことのようにだ。私は駅からの帰り道、常に雲を観察しながら歩いたが、夜になると降り出しそうな気配は消えうせてしまうのだった。三週間もそうしたあと、どんだん体が重たくなつてしまい、帰宅するなりベッドに倒れこんだとたん、強い雨音がしはじめた。私はあわてて窓を開けた。夜を担当する雲がこらえきれなくなつたようで、道路にはもう川ができていた。

石碑のそばにかがんでいたのはユウコだった。差しているうすい緑の傘に大つぶの雨が当たつてひどい音を立てていたが、ユウコは私の足音に気づいたらしく振り返つた。顔はわずかに化粧されていたが、あまり似合っていない。

「いたんだ」

私はだいたいためらったあと、視線を外して言った。墓石には死者の苗字が刻まれている。有森家先祖代々ノ墓。小嶋家ノ墓。なんとかけのはか、というの、甲いにはそぐわないほがらかな感じだ。

ユウコは傘を投げすてた。するとみるみるうちに薄手の服がぬれてユウコの体に張りつき、下着のラインが浮かびあがった。

「んん」

ユウコは大きく口を開けてあくびをし、そのまま両手をあげて伸びをした。服が引っぱられて、胸や腰やももの形がさらに明らかになった。

ユウコはどんどん伸びた。背すじが伸びくちびるが伸び腕が伸びた。それだけでなく横の方向にもユウコは広がっていった。

ユウコはいまや、爪や毛髪がそこかしこについた赤みがかった肉のかたまりとなっていた。ユウコが全体をぶよぶよと震わせると、墓石がかんたんに倒れた。暗くてユウコがどこまで大きくなったのかはよくわからない。雨が肉の表面を汗のように流れる。

ついにこのときが来たのだ。ユウコの膨張に合わせて後ずさりながら、私は自分の鼓動を確認した。

いたるところに乱雑についているユウコの口のうちのひとつがなまぬるい息を吐き出すと、ビニールの表面の水滴が黄色くなった。おそらく強烈な臭いがするのだろうが、私は宇宙服のなかにいるのでくいぎである。

何本あるのか数えられないほど多くの足で、ユウコはゆつくりと移動をはじめた。幼いころから頭を離れない地鳴りのような足音が、いまビニールをびりびりと震わせた。

ユウコは私が住むマンションがある南の方角へ動き出した。墓地のやわらかい土がユウコの重みでへこんで、その穴からはあるはずのない人骨がいくつも顔を出した。

黄色い骨を踏み折りながら、私はクレーターのまんなかへ走った。ユウコの吐き出すべとべとした液体が私の頭を飛びこえて、墓地や寺の木にかかる。汚物じみた色になる木もあれば、葉が一瞬にまつさおになってしまいう木もあった。

私は急いで背すじをまつすぐにし、まぶたを強く閉じて顔を雨雲に向けた。むりに吸いこむまでもなく、空気が深く肺を見たしていく。足は肩幅。左手のこぶしを強く握る。右のこぶしを勢いよく高く突きあげる。まぶたの裏がわの景色が赤で染まり、すぐにまぶたが溶けてなくなる。私は大きく変化していく。もっと大きく。

私は寺の屋根を踏みつけながら、水しぶきをあげて雨のなかを突進し、ユウコに跳びかかって力任せに殴りつけた。表面は触ってみるとゾウの皮のようだった。墓石をつかみあげられるくらい大きくなった私のこぶしが、手ごたえなくずぶずぶとめりこんでいく。

ユウコは歩くのをやめない。ふとんの山を殴っているような感覚が終わらないので、私はユウコからいったん離れて自分の体を見る。

雨でぬるつきはじめた、なめらかな皮膚の下で、外から見てもわかるほど強く心臓が脈打っている。ユウコの背中に何度も蹴りを入れても、ユウコはまったく動じないで、道路に亀裂を入れながら歩いていく。蹴るたびにぼちんぼちんと情けない音がするけれど、それはユウコの歩く地響きにかき消される。

私はついに我慢できなくなつて腕をぐるぐると振り回した。頭が破裂し
そうに痛むので、私は頭を抱えて大声で叫ぶ。

ところが声は出ない。かわりに青白いものが私の両腕からびよんと飛び
出して、ユウコの背中についている丸い口をいっぱい満たす。内向きに
生えたたくさんの牙が次々と折れていくのに、ユウコはピラミッドのよう
な体を引きずつて、私をまったく気にせず歩きつづける。

がらがんしていた頭痛がふつとりと消えて、こんどは吐き気と寒気が全
身を襲う。私は巨大な体を墓地に横たえた。

骨がごろごろと転がっているくぼ地のまんなかで、私は内臓にたつぷり
詰まったものを取り出そうと必死で吐きつづける。あごがうまく開かず、
くちびるの先から白いものがぼたぼたとこぼれて、のどを伝って洋服にか
かつてしまう。破れた宇宙服の切れはしが指にくっついて取れない。液体
を人骨の上にばらまくと、ぬかるみの雨水と混じつて流れていく。くぼ地
に私の吐瀉物がたまっていく。雨水で薄まった白い液体の表面がふるふる
と揺れるのは、ユウコがまだ歩いているからだ。

のどをなにか硬いものがせりあがってくる。たまらず指をつつこんでか
きだすと、それは医療用のばかでかいピンセットだった。やつと出てきた
のだ。角をおおうあぶらみのようなものを爪でそぎ落とすと、ピンセット
はまったく錆びていなかった。私はこれを吐き出したかったのだ。吐き気
は治まり、私は口をぬぐつて呼吸を整えながら、ピンセットを投げた。

「だから言っただろ」

ピンセットは空中で誠司さんのはさみに変わった。伏している私の顔を誠

司さんのはのぞきこんだ。私はあまりのことにまったく声が出ない。

「もつと楽に出てきてもよかったんだ。ちゃんとおれに従わないからこう
いう羽目になる」

白い液体にまみれた誠司さんの頭がふたつに割れて、誠司さんは春田さん
と誠司さんに分かれる。春田さんは丸い瞳を輝かせて私を見下ろす。

「ちゃんと言っただろ、春田さんは幻覚なんだって。北都につごうよく従
う妄想なんだ」

誠司さんと同じように白いどろどろを全身につけた春田さんは紙飛行機
を投げる。ぬれて重たくなった飛行機はすぐに墜落する。

「あなたが幼いころに内臓に入れて、それからずっと育ててきた。いつま
でもあなたに従属しているのはにがてです。火星とおなじくらい」

口のなかにはまだ白いものが残っていてねばねばする。

「じゃ誠司さんも私の妄想なんですか」

「そう、春田さんも俺も同じなんだ。差はない。男でも女でもない」

雨がふたりの体を洗い流していく。私が吐き出した白いものはやわらかい
土にしみこんでしまう。

はるたさん。

せいじさん。

私は立ちあがって南へ走り出した。泥が足をもつれさせるが行かなくて
はならない、ユウコと正確にひとつになるために。

誠司さんはストローをくわえてほっほっと笑う。春田さんもスカート
を揺らしながらほっほっと笑う。

ユウコの何本もの足のなかにはもともと手だったものがあるはずだつ

た。うまくそれに当たればよいが、間違えれば私はぺしやんこになってそれでおしまいだ。道はユウコが大きく広げてくれているから私はまっすぐ行けばよい。

あえぎながらポケットを探ると、丸まったクラブのエースが見つかった。ユウコはハートのエースを持ってきたのだろうか？

私はユウコに追いついて、そのまま彼女の下に走りこんだ。木の幹のように太い足のあいだを、目印を血まなこで捜しながら駆ける。びっしりとあるうるこのなかに、ハート型のものを見つけた気がするが、もう確証はない。私はトランプを握りこんで、その足を思いきり殴る。